三版

明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　毎月一回二日發行

堺枯川編輯

# 家庭雜誌

## 第二號

明治三十六年五月二日發行


茨の花（漫吟）……一
子なき人に與ふる書……一
老人問題……一一
家庭の消息（一）……一五
海豹と人との交り（畵）……一六
梟の一家族（畵）……一七
偶感……一八
中等社會の家庭　小貴族を憎む
浮世風呂を紹介する所以　財産の禍ひ
爵祿の禍ひ　品性と愛情
日本婦人の天性
先づ之を家庭に行へ　袴の皺と筒袖のリボン
夕日岡園遊會の記（永島永洲君）……二〇
家庭の消息（二）……二二
菊坊のお話……二四
家庭文庫古書新書……二六
イソプ教訓談……三〇
なにやかや……三一
匆々一筆……三二


由分社
東京市京橋區新湊町一丁目十七番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

堺枯川著

# 家庭の新風味

全六册合本

著者は此書が多くの新婚の人に讀まれんことを望む。
著者は此書が多くの將に結婚せんとする人に讀まれんとを望む。
著者は又此書が多くの中年の人及び老年の人に讀まれんとを望む。
要するに著者は此書が多くの家庭文庫に備へられんとを望む者である。

赤表紙合本　全一册　割引價金一圓　郵税當方持

▲定價　一册六錢、半年分卅二錢、一年分六十錢。
▲郵税　總べて當方の持の事。
▲注文　總べて前金の事。
▲爲替　本郷二丁目郵便受取所御指定の事。
▲郵券　にて御送金の場合は總べて五厘切手にて一割増の事。
▲前金の切れたる時　●●●●●●　は帶封を朱書にして御注意致すべきに依り直ちに前金御拂込を乞ふ



發行所　東京市京橋區新湊町一丁目十七番地　由分社

大賣捌所
東京神田表神保町　上田屋
東京神田裏神保町　東京堂
東京京橋鎗屋町　良明堂
東京銀座四丁目　東海堂
東京京橋鎗屋町　北隆館

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店

明治三十六年四月廿八日印刷
明治三十六年五月一日發行
同　卅六年十一月廿七日再版發行

發行兼編輯人　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七百三十八番地　堺利彦
印刷人　東京市京橋區日吉町十番地　中村彌助


Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

# 茨の花

茨の花を我れ愛す。
瘦せたる莖、瘦せたる葉、
さゝやかなる白き花、
露おびて朝風にゑめる時、
より清きものやある。
より高きものやある。
櫻の色に我れ耻ぢず、
牡丹の容に我れ傚はず。
我れに我が幽かなる香りあり、
蝶來り、蜂來る、おのづから。
我れに又我が細き針あり、
いさゝか世を刺し、又人を刺す。

# 子なき人に與ふる書

（養子制度を無用有害とするの論）

先日の御手紙に依れば、貴下御夫婦には御子の無き事を深く遺憾におぼされ、斯くては世に在る甲斐も無きほどゆゑ、せめて養子でもして育てゝ見たいとの御事、一應御尤もの次第ながら、小生を以つて之を見れば、頗る反對の說なきにしもあらず、依つてこゝに意中を陳じて御夫婦の御再考を煩はす。

そも〳〵人が子を欲しがるのは何の爲であるかとふに、多くの人の思ふ所は凡そ左の如き者であらう。

（一）我が地位を讓らんが爲。
（二）或が財産を讓らんが爲。
（三）我が事業を傳へんが爲。
（四）我が精神を傳へんが爲。
（五）祖先の祀を繼がせんが爲。
（六）我が無き跡の弔ひの爲。
（七）我が老後の爲。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（八）我が愛の爲。

小生は先づ是れより少しく此八個條を説明致して敢て御夫婦の御參考に供します。先づ

▲我が地位を讓らんが爲　地位とは社會における我が立ち所で、我が品性、我が才能、我が學問、我が職業等に依つて定まるべきもので、此地位を人に讓る事は決して出來ぬ筈である。然るに、昔し封建の時代には、人よりも家を重んじ、人柄よりも家柄を重んじ、地位は人に在らずして家に在つたので、そこで之を代々子から孫に讓つて行つたのである。今でも華族だけは其地位を子から孫に讓つて行く。伯爵は其伯爵の地位を其子に讓り、男爵は其男爵の地位を其子に讓る。然し、是れは只封建時代の遺風が社會の一部分に哀れを止めて居るので、早晩消えうせるべき運命を持つて居るのであるから、殆んど眼中に置くには足らぬ。例へば、江戸城の石垣の一部分が殘つて居るような者で、何も是れが今、城の要害になつて居る譯では無い。そこで、今の社會では、地位を子に讓ると云ふ事は殆



んど實際において無いのである。若しあるとするならば其れは只財産を讓る事である。故に、我が地位を讓らんが爲に子を欲しがるのは、そも／＼間違つた事で、間違つたと云ふよりは寧ろ意味の無い事である。

▲我が財産を讓らんが爲　親（或は祖先）から讓られた財産、或は我が一代に作りあげた財産を、子に讓りたいと考へるのは、今日の人情として實にさもあるべき事ではあるが、財産を讓られた子は果して幸福であるか否か、是れは一つの問題である。昔から財産家の子に餘りエライ人は無い。若旦那と呼ばるゝ人に餘り感心の出來る人物は無い。溫室の中で咲かせられた牡丹は、寒かぜの中に出されゝば直ぐと萎れてしまふ。添へ竹をして作られた菊は、いつまで立つても其添へ竹を離れて獨立する事は出來ぬ。して見れば、財産を讓られた子は餘り幸福では無いらしい。一方にはセツセと働いて其れでも猶不足がちに暮して居るのに、一方には株劵の利子か何かで樂々と懐手で暮して居るのを見れば、さも幸福らしく思はれるけれど、其樣な

生活が生涯無事に行くのは先づ珍らしいくらゐなので、或は惡い道樂を始めて金を使ひすてたり、或は人に乘せられて金を取られたり、或は又躰を弱くして若死をしたり、大がいは氣の毒な末路を見るやうな事になる。よし又、其人一代は無事に過ごされても、其子の代（即ち三代目）くらゐになれば、必ず何か禍ひが起つて來て、身も家も亡びてしまふのが世間の常である。唐様に書く貸家札とは即ちソコの事である。して見れば、財産を讓られるのは子に取りて決して幸福の事では無いのである。贅澤に、怠惰に、遊んで食ふより外には何の役にも立たぬやうに育てられて、そして財産を讓られるよりは、財産などは讓られずとも、相應に學問をさせられて、躰も強く、心も強く育てられて、そして裸の儘で世の中に突きだして貰つた方が、其人の爲には何程の幸福であるか知れぬ。片輪になつて馬車に乘つて行くよりは、丈夫な足を持つてサッサとあるいた方が幾ら善いか知れぬ。して見れば、我が財産を讓らんが爲に子を欲しがるのは、實に馬鹿々々しい、譯の分からぬ話である。

▲**我が事業を傳へんが爲**　商業にせよ、工業にせよ、農業にせよ、或は其他の事業にせよ、我が折角これまでに仕あげたものを、ムザ／＼と人手に渡すは殘念であると云ふのも、是れも人情として一應尤もの事ではあるが、少しく深く考へて見る時には、其間違ひは直ぐに分る筈である。そも／＼事業は何に依らず其れ／＼特別の才能を要するもので、才能のない者が不適當の事業をやる時には、其事業の爲にも、其人の爲にも、只失敗あるのみである。事業を本として云へば、我が子であらうが、他人であらうが、そんな事を眼中におかず、只尤も適當なる才能を撰んで、それに其事業を傳へるのが第一の上策である。人を本として云へば、親の事業であらうが、他人の事業であらうが、そんな事を眼中におかず、只我れに尤も適當なる事業を撰んで、それに從事するのが第一の上策である。されば、我が事業を傳へんが爲に子を欲しがるのは、事業の爲にも、子の爲にも、不親切千万の考へであると云はね

ばならぬ。

▲我が精神を傳へんが爲　是れは前の三個條とは違つて、甚だ深い意味のある事である。我が死後において、我が精神を此社會に殘さんが爲には、誰れしも先づ子を生みたいと思ふのは當然の事である。子は實に我が骨肉の一部分て、其骨肉の中に我が精神の一部分が含まれて居るのてある。生まれながら既に我が精神の含まれて居るのに、更にそれに家庭敎育を施して、我が品性、我が主義、我が趣味を吹きこんて、我が代表者、我が後繼者を次の時代に送りだしたいと云ふ望みは、是れは實に公明正大なる、人の慾てある。されば、我が精神を傳へんが爲に子を欲しがるのは、實に正當の事てある。

▲祖先の祀を繼がせんが爲　祖先を神として祀らねばならぬものとすれば、子の無いのは如何にも不都合てあるから、是非とも其爲に子を欲しがるのも尤もてあるが、其樣な昔風の宗敎の考へを棄てゝ、祖先は只尊敬すべきもの、愛慕すべきもの、記憶すべきものと



するならば、必ずしも是れを祀るには及ばぬ筈である。又、子孫が祀をせねば祖先の方々が地獄に落ちると云ふような考へは、もう大概にしてヤメても善いてあらう。それから又、祖先は我が一家の專有ては無くて、遠く遡のぼればのぼるほど、多くの子々孫々を持つて居られる譯てあるから、必ずしも我が家において祀らねばならぬ事もあるまい。畢竟、祖先と子孫との關係は、やはり、祖先の精神を子孫に傳へると云ふ點より外には無いので、それならば前條とおなじく實に正當の考へてある。されば、祖先の祀を繼がせんが爲に子を欲しがるのは、其實、何の意味も無い事てある。

▲我が無き跡の弔の爲　是れも宗敎的の考へて、子孫の弔ひに依つて極樂に行きたい（或は地獄の苦艱を免れたい）と云ふのであるが、生前にサン〴〵惡業を作つた者が、幾ら子孫に線香を立てゝ貰つたとて、それて極樂に行かれる氣遣ひは決して無い。それほど地獄が恐いなら、現世に多くの善根を積んて未來の果報を願ふが善い。それも凡夫の身て煩惱が押へきれぬ



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と云ふならば、只一心に阿彌陀如來でも信仰して、罪の身ながら御救ひを受けるが善い。善根も積まず、信心もせず、そして幾ら子孫に吊つて貰つたとて、それが何の役に立つものでは無い。されば我が無き跡の吊ひの爲に子を欲しがるのは、是れ亦、其實、何の意味も無い事である。

▲我が老後の爲　是れには二つの意味がある。一つは老後に養つて貰ふ事、今一つは老後に慰めて貰ふ事。前のは衣食の問題で、後のは情の問題である。情の上からして、我が老後の爲に子を欲しがるのは、實にさもあるべき事で、幼き者が親にすがると同じく、老いたる者は若き者に便るべき筈である。老後において、我が子の柔しき手に依り、我が子の樂しげなる顏色に接し、我が子の暖かなる言葉を聞くは、如何に嬉しき事であらうぞ。然しながら、衣食の問題からして、老後に養つて貰ふ事をアテにして謂はゆる左團扇の希望をもつて、其爲に子を育てると云ふに至つては、殆んど沙汰の限りである。子を育てるのは親の務めて、子の方からは恩を受けると云ふけれど、親の方から恩を着せる筈は無い。總べて恩愛は報酬を求める心の無い所が貴いのである。然るに、老後に養つて貰ひたい爲に子を育てると云ふならば、丸で商賣とおなじ事で、行々利益が見たいから資本をかけて置くと云ふ事になつてしまふ。親子の恩愛は決して其樣なものではあるまいと思ふ。そこで親たる者は、出來るだけの力を盡して子を育てあげ、其間に相應の貯蓄もして、老後と云へども相應の働きもして、成るべくは獨立して行くべき筈である。然し色々の事情に依つて其れが出來ぬ場合には、勿論子の家に入つて殘年を送るであらうがそれは其時の自然の成行で、決して初から其時の事を算盤に彈いて掛かるべき筈では無い。尤も、今の世の中では、給金取などの身の上としては、貯蓄も思ふようには出來ず、又年よつて相應の職業を得る事も六かしく、又老人を保護する法なども備はつて居らぬので、隨分老衰して難澁する者が多く、從つて子が無くては安心が出來ぬと云ふ事にもなるので、是れ亦實に無理

ならぬ次第であるが、今少し人情も厚くなり、社會の組織も整頓して、それ〳〵老人保護の法も立つて來れば、人は皆老後の心配もなく、思ふまゝに世に立ち働き、老衰に及んでは、子あれば子に依り、子なければ社會に依り、悠々として殘年を送る事にもなるであらう。斯く考へて行く時には、我が老後の爲に子を欲しがるのは、情の上からとしては誠に善いが、衣食の問題としては甚だ面白くない事になる。(老人保護の事については次の「老人問題」を參照あれ。)

▲**我が愛の爲**　そも〳〵人は夫となり妻となり、親となり子となるべく、自然に愛心が胸の中に植ゑられてあるので、幼き時は親を戀ひ慕ひ、若き時は男女たがひに戀ひ慕ひ、親となりては子を戀ひ慕ひ、幼きより老いるまで常に愛の中に住んで居る者である。そこで若き男女が相戀ひて夫婦となり、やうやく年を經る時は、おのづから子を戀ひ慕ふの情が胸の中に湧いて來る。そこに恰かも子が生まれる時は、將に溢れんとする其情の泉を悉く其子の上に注ぎかけて、そこに



愛の極、戀の極を現するのである。然るに、年經て久しく子を得ぬ時には、其將に溢れんとする情の泉、愛の水を注ぐに所なく、こゝに煩悶苦痛を生じて來るのである。然しながら此愛心は何の爲に人の胸の中に植ゑられたのであるか。人をして子を生み、子を育てるの義務を盡さしめんが爲に、限りなき強き力を與へたのであらうと思ふ。されば、我が愛とは我が義務を盡すの力で、此力に餘りがあればドコにか此力を用ひたいと思ひ、用ゐたいと思うて用ゐる所を得ぬ時は、即ち煩悶苦痛となるのである。故に、我が愛の爲に子を欲しがるのは、實に美しき自然の情であるが、我が愛の爲にと云ふは即ち我が義務を盡さんが爲にの意味である事を、善く〳〵考へておかねばならぬ。然るに、世には此の義務の考へは全たく無くして、たゞ我が眼前の愛慾を充たさんが爲に、頻りに子を欲しがる者がある。是れは子を愛するのでは無くて、子をオモチャにするのである。眞の愛の爲でなくて、オモチャの爲に子を欲しがるのは、例へて云へば、放蕩なる男子が

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

藝妓や娼妓を買ひたがるのと同じ事である。更に繰返して云へば、其の愛の爲に子を欲しがるのは、決して我が快樂を求めんとするのでは無く、我が餘りある力を十分を用ゐ盡して、そこに滿足を得んとするのである。

以上の說明に依れば、人が子を欲しがる理由は、主として、我が愛の爲（即ち我が義務を盡さんが爲）と、我が精神を傳へんが爲とに在るので、其外には、老後の慰めの爲の一個條が僅かに許されて居るのである。其外の多くの個條は皆無用有害の考へである。世間普通の言葉に、子に家を繼がせると云ふが、其家と云ふ言葉は、地位、財產、事業、祀のいづれかを意味するので、總べて前世紀の思想の名殘に外ならぬ。

子に對する小生の考へは大要右の通りであるが、貴下御夫婦において若し右の通り御承認下さるならば、小生は更に進んで養子に對する小生の考へを申し上げたいと思ひます。

▲養子　とは、我が子の無き者が他人の子を養うて我が子とする事であるが、小生は全く此制度を無用有害の者と考へるのであります。試みに前記八個條に當てはめて一々養子の利害を考へて見ましよう。

▲我が地位を讓らんが爲　昔し封建の時代には、當主が死んで後嗣が無ければ家が斷絕する、家が斷絕すれば祿扶持が無くなる、そこで子の無い場合には、必ず養子をして其家柄を取りとめたものである。今でも華族の家は其通りである。然し、平民の家においては、地位を子に讓る事が無いのであるから、其爲に養子をする必要も無い筈である。

▲我が財產を讓らんが爲　子に讓つて子の爲に却つて幸福で無い財產ならば、養子に讓ればヤハリ養子の爲に却つて幸福で無い筈である。尤も、小供の時からの養子で無くて、既に成長した立派な人で、是れに財產を任せるならば必ず大事業を爲すであらうと信ぜらるゝが如き場合に、我が財產を擧げて其人に讓るのは如何にも愉快な、如何にも正當な、如何にも見事な仕方であるが、其場合には何も必ずしも養子とせねばなら

ぬ事は無い。信ずべき友人として置いても善い、見込ある後進の少年として置いても善い。それを是非養子として、我が財産と共に我が姓を譲らうと云ふならば、それは全くの私心私慾である。

▲我が事業を傳へんが爲　子の才能が其事業に適當するかせぬか分らぬと同じく、小供の時からの養子はヤハリ其才能が分らぬ筈である。若し其事業に適當した才能の人を尋ねだして、それを養子として我が事業を傳へると云ふならば、少しも才能の無い我が子に傳へるよりは遙かにマシであるが、然しながら、是れとても、何も必ずしも養子とせねばならぬ事は無い。それよりは、才能が才能を知つて、互ひに知己の感を抱いて、事業を相傳へて行くならば、其意氣は實におもしろいてはあるまいか。それを是非養子として、我が事業と共に我が名を傳へようと云ふならば、それはヤハリ全くの私心私慾である。よし私心私慾と云ふほどの事は無いとしても、少くとも無意味の虚飾たる事は免れぬ。



▲我が精神を傳へんが爲　これは子を欲しがる正當の理由とはなるが、養子を必要とする理由とはならぬ。我が精神の一部分を其躰の中に含んで居る我が子ならば格別、其外の者ならば、誰に向つて我が精神を傳へるも同じ事である。殊に養子をして其人に我が精神を傳へる必要は無い。我が精神を傳へる爲には、談話もある、文章もある。少年を導きたいと思ふならば、私塾を開くも善い、學校を立てるも善い。何も養子をする必要は少しも無い。

▲祖先の祀を繼がせんが爲　祖先と子孫との關係はやはり精神を傳へる點にあるとするならば、前項の理由に依つて、勿論養子の必要は無い筈である。是れは多言するにも及ぶまい。

▲我が無き跡の弔ひの爲　子に弔つて貰つて役に立たぬものを、養子に弔つて貰つたとて別段効能のあらう筈は無い。是れも多言するには及ぶまい。

▲我が老後の爲　衣食の問題からであるならば、我が子に對してすら面白くない考であるゆゑ、養子に需

しては更に面白くない筈である。老後に養つて貰ひたいが爲に養子をすると云ふならば、それこそ全くの商法で、美しい所は微塵も無い。それほどならば貯金をする方が餘程無い。次に情の上からの事としても、養育の恩を着せておいて、そして跡で樂しくして貰はうと云ふのは、やはりドコやら商法めいて、報酬の考へが付きまとうて居て面白くない。それで若し其養子が跡になつて樂しくして呉れぬ時には、折角のアテが外れて、不足となり、失望となり、怨みとなり、憎みとなり、さん／＼な事になつてしまふ。イツソそれよりか養子などせずに、親戚に對し、友人に對し、隣人に對し、其他すべての世の人に對し、眞心をもつて常日頃から親切に交はつて、或一人をアテにせずに、廣く此人情に信を置いて、我が盡すべき所を盡して行くならば、我が老後になつて必ず心さびしい事は無いであらうと思ふ。

▲**我が愛の爲**　オモチャの爲に我が子を育てるのが悪いとすれば、オモチャの爲に他人の子を育てるのは更に悪い筈である。他人の子を養つて、人形でも貰つて來たように思つて居るのは、其子に對し、其親に對し、實に容易ならぬ無禮である。次に、オモチャの考へは全く無く、眞に我が愛の爲に、即ち我が義務を盡さんが爲に、即ち我が餘れる力を用ゐんが爲に、我が子の代りに他人の子を育てるのは、是れは實に貴い事業である。然しながら、其他人の子を我が子と呼ばねばならぬ事は決して無い、即ち養子とせねばならぬ事は決して無い。養子と云ひ、我が子と呼ぶのは、必ず多少の私心私慾が其中に混じて居るのである。

右の如く考へてみれば、養子といふ者の無用有害なる事は明かで、貴下御夫婦におかれても必ず御得心の事と御察し申す。既に右の條々御得心とあれば、小生は更に是れより進んで貴下御夫婦の御身上につき、猶少しく申上げたいと存じます。

貴下御夫婦が御子の無き事を深く遺憾におぼさるるは、如何にも御尤もの次第であつて、貴下御夫婦の美しき御精神を、其まゝに傳へる事の出來ぬのは、此社

會の爲に小生も深く遺憾と存ずるのであります。然しながら、そこが即ち天命の在る所で、子のある者は子のある所に天職を持ち、子の無き者は子の無き所に天職を持ち、各々天命に從つて天職を果すのが、我々人間の道であると小生は存ずるのであります。されば、貴下御夫婦の如きは、其限りなき愛の力と其少からぬ財產とを以つて、多くの孤兒を養ひ、多くの惱める人を救ひ、多くの貧しき者を助け、多くの惡しき者を敎へたまはば、御夫婦の老後は、衆人の感謝と御自身の滿足その間に、樂しく安らかに過され、猶御夫婦の無き跡にては、其博愛の精神と其慈善の事業とが、永くいつまでも世に傳へられて、御夫婦の名はヨシ消ゆるとも、其功德は消ゆる時なく、弔ひよりも、祀よりも、御夫婦の爲に嘸うれしき御事であらうと存じられます。又、御考へ次第に依りては、必ずしも多くの人を我が手に養はず（或は助けず）とも、種々なる世の善き事業に力を貸し、我れに子なければこそ是れだけの暇と金とを人の爲に費す事が出來るのであると思ひ、そこに我が心を慰めて日を送る中、若し又自然の因緣にて、貧しき人の子、或は孤兒などの、恰も我が手に授けられたるが如く、恰も我が手に托せられたるが如く感ずる場合もあらば、それこそ引きとりて我が子の如くに育てたまふも、亦是れ天意に從ふ以所かと考へます。

斯くても猶貴下御夫婦には世に在る甲斐なきようにおぼしめさるゝか。否々、もはや決して左樣の御心は起らぬ事と小生は堅く信じて疑はぬ者であります。長文さぞかし讀みづらくおぼしめしの事と存じます。恐惶頓首。



△女房が留守でナガシは椀だらけ
△產あげく、亭主使ふが癖になり
△嫁の舌三日月なりに醫者に見せ
△持參金、嫁ナケナシの鼻にかけ
△赤ン坊を輕々抱いて叱られる
△裸の子、面白がつて逃げるなり
△わん白や、縛られながら呼ぶ爺
△人並に晝寐したふりする子かな
△柿の木でアイと答へる小僧かな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

# 老人問題

▲家庭における老人の地位▲家族制度の弊▲親子別居說▲子の家の家族▲厄介者▲獨逸の强制保險▲デンマーク及びニュージーランドの老人保護法▲國家と云ふ大家庭▲子の無い老人▲養老院の必要▲デンマークの養老院▲コーペンハーゲンの養老院▲フレデンスボルグの養老院

今の日本の家庭における老人の地位は甚だ困難なる問題となつて居る。只老人としてならば何も別に困難な筈は無いのであるが、老人には親と云ふ名がつくので、それで事が大變に面倒になる。全體ならば、此親と云ふ名は、只親しむべく、慕ふべく、愛すべく、懷くべき言葉であるのに、家族制度の弊として、親に無上の權力を與へたので、親といへば、只恐ろしく尊きものに思はれる事となつて、親の方でも「亦親ぢやぞや、親ぢやぞや」と自分から威光を振りちらすほどにもなつた。此弊が今日までも猶殘つて居て、兎角親の權力が强すぎて困る場合が甚だ多い。それも親が子を育てゝ居る間ならば、また甚しき困難とはならぬけれど、子が既に成人して、妻（或は夫）を持ち、立派に一人前として働いて居る場合には、種々なる不都合が其間に生じて來る。嫁と姑の爭ひも大概は是れてある。そこて我輩は平生から親子別居の說に贊成して居るのである。親子別居と云へば大變に水くさく聞えるけれど、同居して喧嘩するよりは別居して仲善くする方が餘程善いと我輩は思ふ。然し此別居の說は、親夫婦がまだ達者で居る間の事で、其一方が無くなつたり、或は兩方とも全く老衰したり、した場合には、云ふまでもなく子の家に同居するより外は無い。それで其場合には、モウ親と云ふ恐ろしい兜は脫ぎすてゝ、只老人として子の家の家族となるべきである。家庭における老人の地位は正に斯くあるべき事と我輩は考へる。

斯く云へばとて、我輩は決して老人を厄介者として粗末にする考へては無い。今の世に盛んに働きつゝある夫婦を中心として、一方には過去の世にそれ〲の働きを濟まして來た老人があり、一方には未來の世に大いなる働きを爲すべき小供があり、是れが一團とな

つて家庭を作るならば、それほど美しい、賑かな景色はあるまいと思ふ。そうして家庭の中心たる夫婦の心得としては、未來において働くべき小供を當然の事として世話する如く、過去において働いて來た老人をも當然の事として世話すべき筈である。

然しながら、老人に貯蓄の金もなく、其子の家も活計に迫はれて居る塲合には、子はドウしても老人を厄介者と見て粗末にするような事になり、老人も亦みづから厄介者と思うて世をはかなむような事にもなる。それをヤレ不孝の、ヤレ不人情のと云つて、子の方ばかりを責めた所で仕方が無い。さりとて、老人にナゼ貯金でもして置かなんだと責めた所で、是れ亦仕方がある譯では無い。そこで獨逸の國などには、强制保險といふ法があつて、別に財産も無く給料ばかりで暮して居る者には、法律で强制して、否應なしに何程かづゝ積金をさせる、そして其積金に對して、雇主からも同じ高の積金をする、政府からも補助をする、そうしておいて、七十歳以上になつた時、或は七十歳以前て



も老衰して仕事の出來ぬようになつた時、それに年金を與へる仕組になつて居る。獨逸は種々なる保險法を行うて居るので有名の國であるが、其外の國々でも皆それ〲に老人保護の法が立つて居る。中にも尤も結構なるはヨーロッパのデンマークとオーストラリアのニユージーランドとである。デンマークでは別に掛金はさせずに、只六十歳以上になつて、自己の不品行の爲でなくして自活の道の無い者には二百四十フラン(凡そ百二十圓)の年金を與へる。ニユージーランドでも掛金は無く、只廿五年以上國内に住居して品行善良なる者が六十五歳に達する時には、十八磅(凡そ百八十圓)の年金を與へる。何と結構な老人保護法ではありませぬか。

家庭は社會の尤も小き者で、社會は家庭の大いなる者であるとすれば、國家と云ふ此大社會を一つの大家庭と見る事も出來る。されば此大家庭において、過去の働きを濟ませて來た老人に對し、種々保護の法を立てるのは人情の上から當然の事であつて、日本なども

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

早くデンマークやニユージーランドのように、結構な老人保護法を定めたいものである。斯くて我々が家庭において老人を世話する如く國家においても老人を保護し、國家が保護を與へる故に貧しき家庭においても老人の世話が行きとゞくと云ふ事になれば、老人問題は先づ解釋せられたと云つても善い。

然し、まだ殘つて居る問題は、子の無い老人の事である。子の無い老人の爲には、國家は年金を與へるばかりで無く、家庭を拵へてやらねばならぬ。國家と云ふ大家庭の中に、是れらの老人を置くべき部屋を定めてやらねばならぬ。そこで養老院の必要が生じて來る。西洋では養老院の事をオールド、エージ、ホームと呼んで居る。オールド、エージとは老年と云ふ事で、ホームとは即ち家庭と云ふ事である。是れから少しくデンマークの養老院の有樣を記して見よう。

前に云つた通り、デンマークでは、六十歳以上になつて、自己の不品行の爲でなくして衣食の道の無い者には、國家は直ちに保護を與へる。保護を與へると云つても、決して貧民として取扱ふのでは無くて、丁度休職の軍人か官吏かのように、云はゞ國家に功勞のあつた元老として優待するのである。そして彼等の中で、世話になるべき親戚のある者や、或はまだ相應に達者で自分獨り暮して行かれる者には、前に記した年金を與へる事として、其他の者は悉く養老院に收容せられる。

斯の如き次第であるから、養老院に收容せられる事は、決して恥辱では無くして寧ろ名譽である、國家の厄介になるのではなくして我が權利を行ふのである。故に彼等は此養老院を以て實に我が物と思ひ、我が家と思うて居る。即ち彼等は安んじて此共同家庭に其殘年を送るのである。彼等が社會における地位の少しも常の人と異ならぬ證據には、彼等の中の男子は皆選擧權を持つて居る。日本で選擧權を持つて居るのは幾らか金持の部類であるが、デンマークでは養老院の中の老人がそれを持つて居る。それから、彼等が院內で受けて居る取扱ひを見るに、凡そ何人でも、其院の院長



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ても、彼等の室に入る時には必ず其戸を叩いて許しを得ねばならぬ。又、院の事務員は全く彼等の召使ひてあつて、實に親切丁寧を極めて居る。彼等は勝手な時に起き、勝手な時に寢ね（勿論大躰において時間の定めはあるが）、そして氣に向いた時には自由に散歩にも出かけるし、知る人をも訪問する。彼等は又幾らかの小使錢を貰つて居て、好な事にそれを使ふ。然し、ビールを飲んて其金を使つたり、或は又善くない所に出かけて行つたりする時には、小使錢は取りあげられるし、散歩は院内の庭園に限られるし、そして猶品行が治まらぬ時には、とう〳〵退院させられて貧民院に入れられてしまふ。養老院は貧民院の外に立つて居るのて、それて品格があるのてある。

デンマークの首府たるコーペンハーゲンにある養老院は、他の養老院の模範てあるが、院内は如何にも清潔て、家は美しき園の中に建てられて、其部屋々々は光線が十分て、冬は暖かく、夏は涼しく、質素てはあるが相應の裝飾もある。入院者は四百名ばかり、片



側の室にはお爺さんを入れ、片側の室にはお婆さんを入れ、夫婦者には又別の室があてがつてある。食物は又特に注意せられて、齒の無い人々の口に合ふような物ばかり拵へられる。今こゝの料理を引受けて居るのは、曾て有名な旅館に居た料理人て「此町の老人達にオレの庖刀加減て旨く食はせてあげるのだ」と云つて、金の掛からぬ旨い料理を熱心に拵へて居る。食事は勿論皆食堂てするのてあるが、めい〳〵の部屋にも亦多少の食物が許される。毎朝七時には暖かい牛乳が大コップに一杯づゝ配り渡される。ビールも毎日半壜だけ與へられる。一週間に二度は、パン、バタ、チーズなども配られる。午前と午後とに、彼等は勝手にコーヒーを入れて飲んて居る。それから又、彼等の爲に院内において軍樂隊の合奏が催される事もある。或種類の芝居は無料て見に行かれる事にもなつて居る。

首府の養老院は斯樣な有樣てあるが、田舍の養老院も亦甚だ樂しげに出來て居る。一例としてフレデンスボルグと云ふ所の養老院の事を記して見よう。それは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山の裾に建てられた眞白い平家作て、風は後の山て防ぎ、日光は眞正面から射しこんて來る。庭園には柳の木だの何だのが風情よく植ゑられて、其蔭には亭などが作つてある。入院者は僅かに十六人て、皆が一家族になつて暮して居る。尤も銘々に小い部屋は持つて居て、獨りて居たい時にはソコに引込む事になつて居る。そして此院は近隣三個村の組合て建てられた者てある。

夫婦の住む所としての家庭を美しくする事は無論てあるが、更に廣い意味の家庭、即ち養老院の如き者を、我が日本においても早く拵へて貰ひたいものてある。それが出來るまては、老人問題はまだ全く解釋せられたとは云はれぬ。

或中學校の先生が、頭をかき〳〵コンナ話をした事があつた。「或日學校て、ヤンチヤ者の生徒に數學の問題を與へた所が、ナニ[illegible]の無い安い問題てあるのにチツとも出來ぬ。そこて私が「アナタそんな事て耻かしくは無いか。ワシントンなどはアナタの年にはモウ立派な測量技師になつて居たのに」と云ふと、其生徒はジツト私の顔を見て斯う云つた。「そうです。そしてワシントンは先生の年にはモウちやんと大統領になつて居ました。」



## ●家庭の消息（一）

### 若き娘より親しき仲の細君へ

又々お子さま御生れのよし。是れて何人目に入らせれしやら、五人目？六人目？ 相濟まぬ事ながらツイ忘れてしまひました。此次の御手紙には御名前と生年月とを一覽表にしてお見せ下さいませぬか。それに寫眞を添へて下さらば猶更結構。私は御存じのがサツ者、コンナ失禮な事ばかり申しあげます。それても私は小供が好て御座います。御長男の總さんの事は普く覺えて居ります。モウ十一二におなりですか知らん、隨分イタヅラなお子さんてしたが。其お次からは普く存じませぬが、何ても男のお子さんばかりて御座いましたネ。それに今度は珍らしくお孃様とは、松の林に櫻の一本、ホンに善い眺て御座いましよう。私は見たくて見たくて塡りませぬ。ぜひ〳〵御寫眞を願ひます。

是れからチト私の内の事を申しあげます。私の内ては先づ父母無事、兄は御存じの通り昨年から支那に參つて居ります。弟は東京の學校に參つて居りますし、内に居るのは私ばかりて御座います。私はモウ數へ年の廿三て御座いますから（おや〳〵モウそんなになつたかとビツクリなさるてしよう）、そうウカ〳〵としては居られぬと母などは八かましく申しますけれど、まけをしみても何てもなく、私はホントにまだ若い氣て皆様お探しの嫁入話などに少しも耳を傾けた事は御座いませぬ。そして毎日例の學校にセツセと務めて居ります。モウ大分お金がたまりましたよ。左様なら。母からも宜しくと申しました。

五月一日午前九時（ア、今日は善いお天氣です）

本田の姉上さま

幸より

## ◉海豹と人との交り

スコツトランドの海岸に住んで居る或紳士が、海豹を子飼にして、其鰭に綱をつけて、毎日海に連れて行つては泳がせて居たところ、或日の事、綱がはづれて海豹は自由の身となつたが、それても逃げて行かうとはせず、只そこらあたりを泳ぎまはつて居る。それで紳士が聲をかけて手招きをすれば、ノツ〳〵とやつて來て、とう〳〵矢張り紳士の家までツイて歸つて來た。其後はモウ一さい綱なしで、犬か猫かのように久しく紳士の家に飼はれて居たが、紳士が外出すれば寂しがつて物も食はず、紳士が歸つて來れば大喜びで出迎へるほどであつたといふ事。

▲罪の中に泳ぐ者は終に悲みの淵に沈む。

▲吠える犬は眠る獅子よりも役に立つ。

▲玉子を盗む者は牛を盗むに至る。

▲親切は親切を産む。

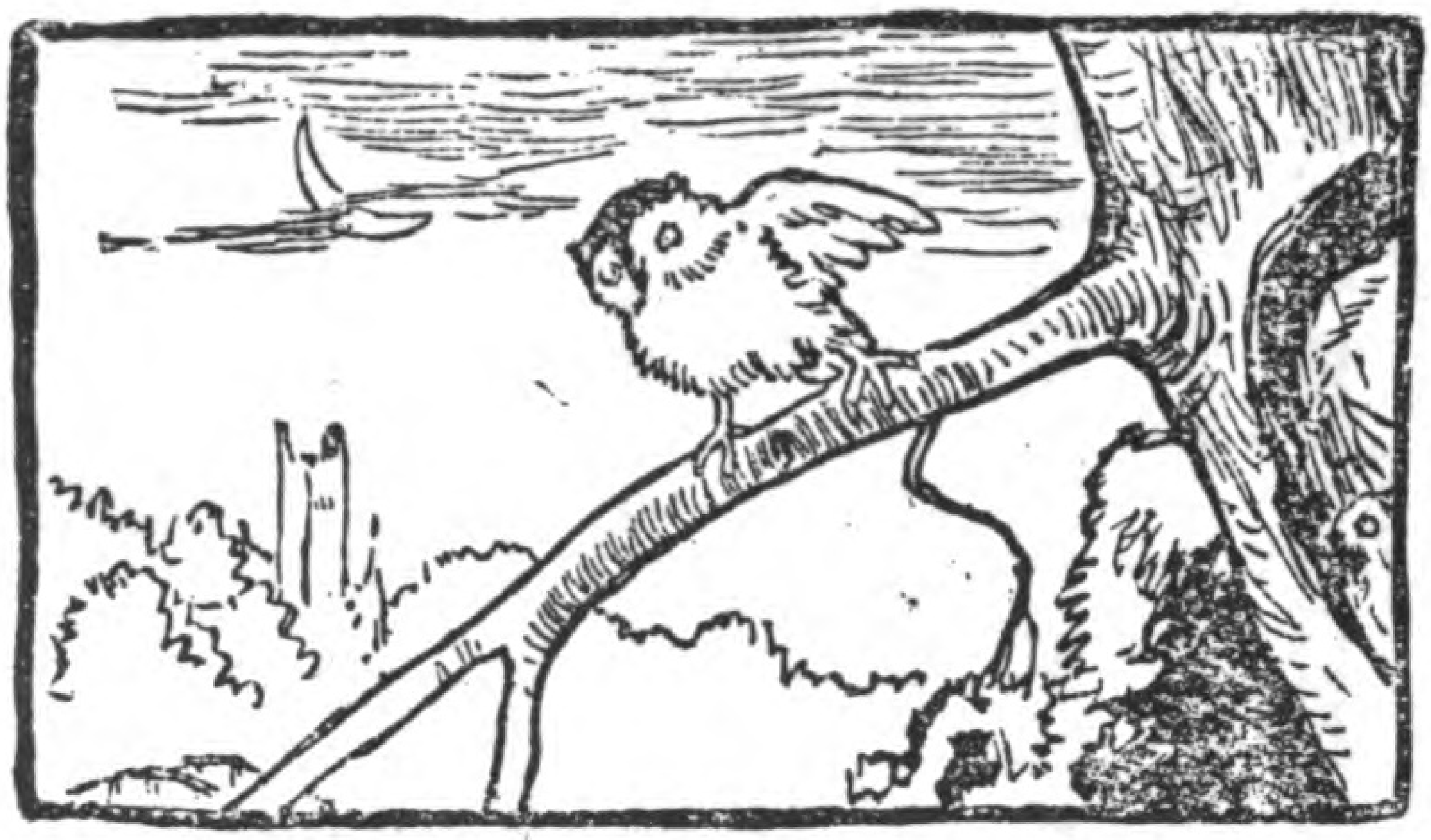


Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

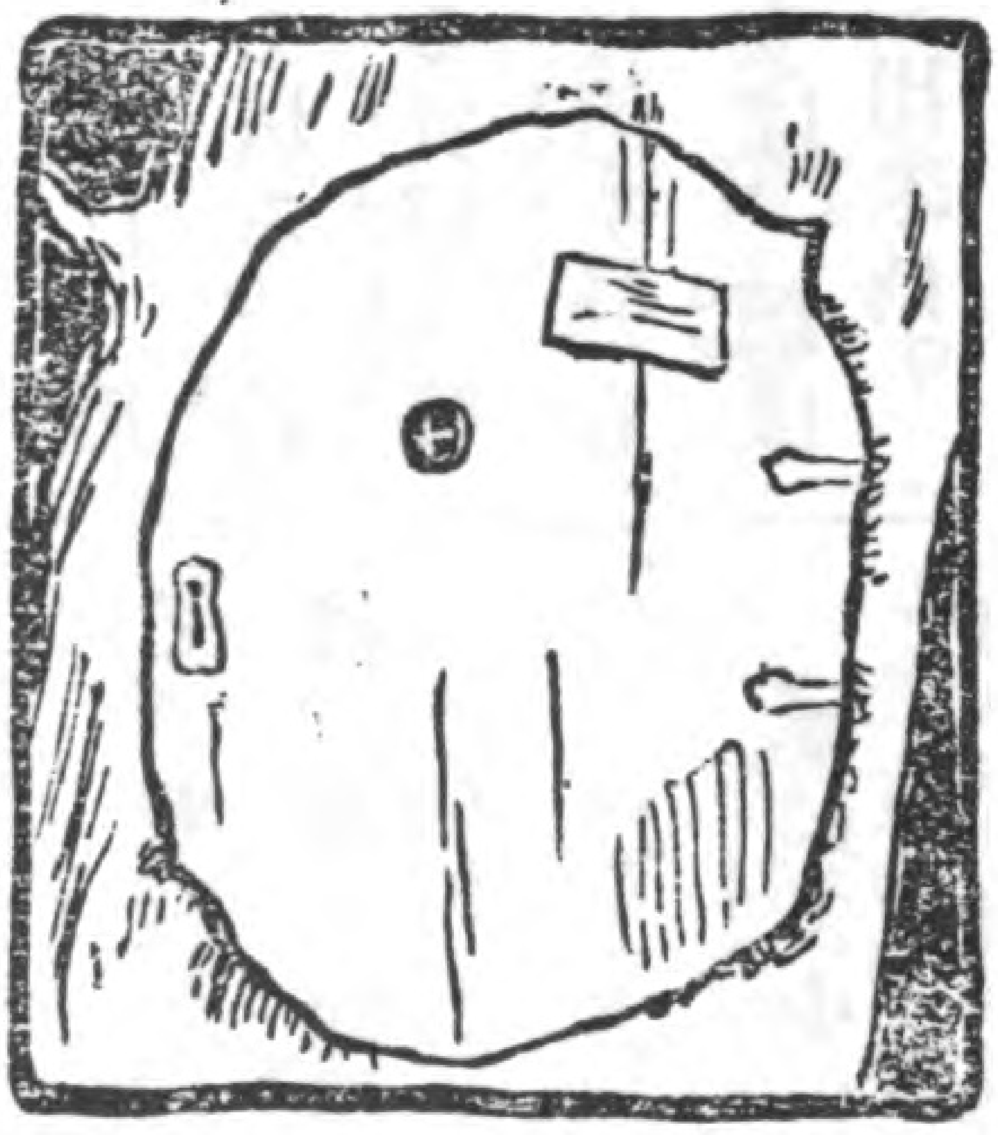
# 梟の一家族

（一）（梟の子）僕もオトッさんのよ
うに外に出て遊びたい
（母親）今に連れて行きますよ



（二）（梟の子）オッカさんなんぞに連れて行つて貰
はなくても僕は獨りで遊びに出るんだ三日月は
出てるし實に好い景色だアヽ面白い

（三）（梟の母）あの子はマア
どこに行つたやら氣づか
ひな事ではある



（四）梟の一家はイタヅラ子が
歸らぬので仕方なしに戸
をしめて寢てしまつた

（五）（梟の子）雨にかかると
大きくなると云ふからモ
ッしばらく外に居よう

（六）翌日の朝
（梟の母）お前はマア昨夜
夜どほしドコに居ました

（七）梟の母は怒つて見たけれ
どヤハリ可愛いので内に
入れて抱きしめた

（八）イタヅラ子も歸つて來
るし梟の一家族は天下
太平に眠つて居る



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

# 偶感

## △中等社會の家庭

いつの世においても尤も健全なる家庭は中等社會のこれであらう。我輩は中等社會においてのみ眞に品格ある婦人を見る。多くの妾を有し、多くの藝者あがりの令夫人を有する、謂はゆる上流社會においては、虛僞、輕薄、淫猥の氣が常に家庭に充ち滿ちて居る。若し中等社會の婦人達が、徒らに世の謂はゆる貴婦人等を羨むならば、そは實に己のれの有する玉の價を知らぬ者である。華美なる服裝を外に求めんよりは、願はくば内に品格の玉を硏け。

## △小貴族を憎む

謂はゆる上流社會を羨むの結果、强いて自ら上流社會に擬し、言語、態度、宛然たる小貴族となりすまして、獨り自ら得々たる者がある。我輩は尤も深く中等社會の質素なる生活を輕蔑すると同時に、又尤も深く



是等中等社會の小貴族を憎む者である。

## △浮世風呂を紹介する所以

中等社會の小貴族の細君が、さも奥樣然として下女下男を追ひつかひ、自分は生れながらの別人種でもあるかの如く振舞ふを見る時、我輩は其賤しき根性を洗ひさらして、飽くまで罵りたほしてやりたい心地がする。我輩が別項に三馬の浮世風呂の一節を紹介したのは、全く此溜飮を下げたいからである。

## △財產の禍ひ

家に多少の財產あるが爲に、兄弟の爭ひとなり、嫡子と庶子との爭ひとなり、後見人と當主との間の訴訟沙汰となり、二派に別れたる親族間の猜忌嫉妬となり、或は廢嫡騷となり、或は離婚騷となり、兎も角も多少のお家騷動を引きおこす例は、眼前歷々、殆んど數へきれぬ程である。財產の禍ひも亦甚だしいかな。

## △爵祿の禍ひ

大隈伯爵家においては、既に若夫婦の間に生木を割くような離婚が強いて行はれた。それに次いて、長女を廢嫡して家督を次女の婿たる人に讓る事の訴訟が起つて居る。爵祿の禍ひも亦甚だしいかな。

### △品性と愛情

財產なく爵祿なき家は幸ひなるかな。勞働して衣食する者てなくては眞に家庭の樂みを覺る事は出來ぬ。爵祿は家庭の神聖を汚し、財產は家庭の平和を破る者てある。世の少年少女、品性の爵祿よりも尊きを知れ、愛情の財產よりも重きを見よ。

### △日本婦人の天性

別項、永洲氏の筆に依つて記されたる園遊會について我輩の深く感じた事がある。永洲氏も書いて居られる如く、此日、細君達が皆頗る活潑に運動せられた。平生のハニカミ、人みしり、馬鹿遠慮、馬鹿丁寧、虛僞、虛禮、優柔、因循の風が殆んど全く見えなんだ。是れは抑々何故てあらうか。我輩思ふに、是れ全く、疊の上に坐る事と芝の上に立つ事との差てある。日本婦人は天性決して今日の如きイクヂなしては無いのてあるか、久しく家の中の疊に上にばかり押しこめられて居たので、それてトウ〳〵鴨がアヒルになつてしまつたのてある。されば日本婦人今後の急務は、多く戶外に出て多く人に交り、活潑にして元氣ある鴨の天性に立戻る事てある。

### △袴の皺、筒袖のリボン

少女の服裝は今正に着々として改良せられつゝある。袴は既に一般の風俗となつた。筒袖も殆んど爭ふべからざる勢ひとなつて來た。而して、其袴の皺と筒袖のリボンとを見る時、日本人の趣味と意匠とが如何に賴もしきものてあるかを知る事が出來る。此趣味と意匠との間に世はズン〳〵と變遷進化して行くのてある。老人は仕方が無いとしても、今の若い者が此間にイツまで舊弊を守つて居られう。

### △先づ之を家庭に行へ

大臣となつて一國の政治を取る前に、校長となつて幾千の學生を敎へる前に、總べて地位を得て其平生の主義主張を行ふ前に、請ふ先づ之を家庭に行へ、必ず先づ之を己のれの家庭に行へ。

# 夕日岡園遊會の記

永島永洲

花も一重は散つて、青葉若葉の目に新らしく晴れ渡つた去る四月十九日といふに、吾等同人の園遊會は、芝白金今里町の夕日ケ岡、眠柳加藤氏の庭園に開かれた。新任の披露を兼ねた長官の催しでもなければ、社員の慰勞を主とする社長の企てゞもない、全く親友の家族同士が相會し相樂む爲めの會で、一昨年も昨年も此庭に開かれたのを、今年も尋いて聊か規模を大きくしたのである。先づ順序として會場の概景から述べやう。所謂夕日ケ岡の上に在る眠柳の家は、東に樫、槻、猶などの林を控え、其下の細く清い流れに土橋を架して、人を門に導き、北と西とは麥畑、苺畑、千菜畑を隔て、、生ひ茂つた竹藪やら、疎な樫の林を圍ひ込み、南は緣先きの庭砌を起點として、直ぐに廣やかな芝生となり、芝生からだら〱下りの麥畑に續いて、生垣の外に地勢は猶ほも降り止まず、田となり、畦となり、水車となり、右は遙かに霞む池田邸の松林を涯りとして、左は何やらの宮の華表となり、葉隱れの大崎停車場となり、朝に夕に千万の景趣を開展して、さて岡の上の茅葺一軒、その日當りの好い、端居の煙草盆に、畫のやうな風色を聚めて居る。

それから前にいつた芝生、是れが又尤も得がたいもので、方形の數百坪、平坦砥の如きが上に、青毛氈を敷き詰めた柴草の美しさ。中央には背の低い、圓く苅り込んだ古松が三本、居どころ好う鼎に立つて、清い陰を芝生の上に造り、周圍には八重櫻、山吹、海棠の花、楓の若葉、一八、牡丹の蕾などが、とり〲に趣きを添へて居る。この芝生こそ、實に同人の會が屢々眠柳の家を煩はす第一の原因となつて居のである。

さてこの美しい芝生の上の園遊會を樂しむべく、やがて來り會したのは、小林蹴月、同夫人綾子、令息晉氏、同居の學生鈴木氏、堺枯川、同夫人道子、令孃まがら子、家婢竹子、福田英子、堀紫山、石橋思案、田村江東、同夫人繁子、近藤氏、清氏、河野氏、上司氏、同夫人雪子、令孃照子、藤浪華汀、及び余と余の家族千




Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

代、ふみ、雄二郎等である。而して此日の主人たる眠柳、同夫人梅子、眠柳の父君、母堂等が、一家擧つて此會の樂みを僣にしたのは言ふまでもなく、前日來種々の準備に苦心し、當日も主人の役目として、同人の興を添へ樂みを扶けるとに力められたのは、一同の感謝に堪へぬ所である。

斯くて午前十一時頃から、接待の店は開かれた。芝生と麥畑との境をトして、右には咲き匂ふ八重櫻の下に、麥酒煙草の店、左には樫、槻の木に掩はれて、一八と海棠を前後にした今川燒の店、何れも主人の骨折りで、葭簀張りの、見るから淸く心地好い店が出來て居る。それて前のには蹴月庵の旗を飜し、驚く勿れタヾと貼札して、蹴月夫妻之れを受持ち、後のは芝浦亭今川燒と銘打つた暖簾をかけ、御景差上不申候の看板の下に、田村夫人手襷がけとなつて甲斐々々しく鐵鍋を執れば、江東は洋服のまゝ、大汗になつて爐の火を煽ぐ。その間に加藤夫人は、彼の三松の陰に食卓を並べ、日本酒、筍の旨煮、三ッ葉と豚肉のぬた、牛肉と燒豆腐の煮付、筍飯、五目飯などを運び出して、麥酒のこぼれ、今川燒のあぶれを此に喰ひ止める。

櫻には虻の聲長閑に、竹藪には頻りに鶯が啼いて居る、眼を擧ぐれば、田も家も林も、霞の中の模樣となつて、暖かく麗かな亭午の日は、今や杯を把る人、餠を頰張る人、箸を持つて踊る人、手招きする人、走り行く人、振起る人、佇む人、椅子に凭る人、芝生の上に胡座搔く人、是等の樣々な姿に松を取添へ、櫻を泥ぜて、芝生の上に一幅樂園の圖を描き出した。

醉は好き程に廻り、腹は好き程に飽いた比、いざや鬼ごつこは始まつた。逃げる、追ひかける、捉まへる、燕返しして潜り拔ける。手觸りはジャン拳で鬼になる。無論婦人も小供もその數には漏れぬので、花も木も震ぐばかりの動搖みを返した。

一同疲れて木蔭に憩ふと、復た酒が來る、今川燒が招く。この時、片や新堀、片や有樂町と相撲の名告が不意に擧つた。見ると紫山と蹴月が、芝生の上に犬居となり、念入りに仕切つて居る。脱ぎ棄てた草履を圍く

散らして土俵に代へ、今川燒の江東、何時か行司と轉業した。見物は誰れあらう夫人達、中々以て贔屓の立會ひてある。立上つた、ハツケヨイ發つた、勝負あつた、ドツと笑ふ聲、拍手の音。

枯川も出た、思案も出た、近藤も出た、眠柳も出た。着物は襯衣に、襯衣は赤條々に、剝られるほど興はいよ〳〵高くなつたが、最後に現はれた新進の力士、年少の鈴木の爲めに、大方は取つて投げられたのも一興てあつた。

次に福引は催された。是れは銘々出品して、銘々に鬮を引き中てるので、題の中には面白いのもあり、滑稽なのもあり、窮したのも、拙いのもあつた。就中、枯川の家の出品の「當世の女學生」といふ題て、蝦と茶と糠を出し、海老茶式部を利かせる心算てあつたのが、生憎蝦が見當らなかつたので、餘儀なく蝦蛄に代理を命じ、燕を鳥ではなく、蝦蛄を蝦と捏付けたなぞは、先づ以て當日隨一の滑稽といゝつべきてあらう。

福引の獲物が大笑ひの裡に行き渡ると、今度は一同輪の坐を作り、百万遍の型て細糸を把つた。その糸には一個の穴明き錢を通して、それを隣から隣へと、見えぬやうに廻してやるのを、眞中に鬼が居て、その行衞を指し中てる。中てられた人は、隱し藝を演ずるとに定めたが、さて藝とては一つも出ない、中には輪の坐の唯中に大の字に寢轉んで、是れて御免と逃げるもあれば、衣被ぎを喰つて、舌打をして見せるのもあつた。

斯る無邪氣な、果しもない樂みの中に、情なくも春の日影は、櫻の枝に夕風寒く訪づれる頃となつた。さらばとばかり、眠柳が芝生の上へ持出した唐紙に、讃やら發句やら、思案の所謂砂書めいて、銘々紀念の筆の跡を留め、加藤夫人が持做し振りの汁粉に腹を拵へて、名殘の鬼ごつこをば今一度この樂しき夕日ケ岡の上に繰返し、見返り勝ちに此を辭したのは、向ふの松林、何やらの宮の華表が、早や夕靄に隱れて了つた午後六時の頃である。

凡そ世に園遊會の催しは多いが、また此會ほど園遊會の理想を眞正に發揮し得たものはあるまい。主人も客も細君も小供も家婢も、盡く同じ團欒の數に入つて、遊びたい程遊び、笑ひたい程笑ひ、その間に一點の邪念もなく、一毫の隔意もなく、それ〳〵家族的の樂みを樂み得たその境界の眞率にして清潔なる、その趣味の高尚にして無限なる、決して彼のお義理の足を遠

庶の庭に遊んで、苦痛の表面を樂しげに取繕はねばならぬ際の、夢想だもする能はざる所であらう。且つは今日の日本婦人の通弊として、萬事控目の弱々しく取做し、人見知り勝ちの拙々しくは物も言ひ得ぬ、是れが婦人の守るべき德としてある。實際その祖母も、その母も、今川庭訓の束縛の中に一生を過ぎたものとすれば、その孫たり子たる此庭の婦人達も、猶ほその遺習の幾分を受け繼て居るに相違ない。然るに此日の言動は、平生と打つて變つて、何れも好く語り、好く親しみ、好く笑ひ、好く走られた。その活々しさ、賴もしさは、想ふに自然の美景と愉快なる園遊とに薫化されて、忽ち數百年以來の遺傳たる人爲の桎梏を微塵に碎き、こゝに婦人本來の天性を發露した者であらう。されば此日の樂みは、夕日ヶ岡の夕日と共に假し盡さるとも、餘韻は猶ほも春風の裡に何事かの敎訓を呼いて、永くこの園遊會の生命を存するとであらう。願はくば今後とも此會を繼續して、會の娛樂と共に益々其利益を篤くしやうではないかと、吾れも人も互に誓ひ合ふと同時に、世に此種の會を試みる者の出來んとを冀るの餘り、斯くは長々しくも會の模樣を紹介するとにした。

## ●家庭の消息（二）

### 或紳士より親しき友人へ

今日は雨が降つて久しぶり一日ヒマで内に居るから、方々へ手紙の負債を拂はうと思ひ立つた。文債、詩債など云ふが、手紙も實に負債だね。それて先づ第一に君に向つて書くのであるが、さればとて又別段に書く程の事もない。僕の家の近狀は先づザット左の通りだ。

一、貧乏依然、一瓢裂三十年、フロツクコートの包み釦が破れてからモウ久しいものだ。

一、晩酌はやらんが折々少しは飲む。ビール尤も妙。

一、子供は二人とも學校に行く。兄の方は少し馬鹿だがアンなのが案外になるかも知れんと思うて居る。弟の方は滑稽なヤツでね、頗る我が家庭を賑はせる。

一、妻は年を取つたね。それも其筈で少しも不思議は無いが、折々は罵く事があるよ。(妻曰く、自分のオツムの禿げかゝつた事は忘れて)

一、僕は去年の春に小さな書齋を作つた。是れだけが貧乏の中の道樂さ。座敷の緣側つゞきに四疊半の建増をしたのだが、安いものだ。百圓たらずで出來た。前後左右、本に取圍まれて坐つて居ると是れほど愉快な事はない。

一、それから妻の道樂が又一つ出來た。それは蜜蜂さ。まだ二箱しか無いが中々おもしろいものだよ。

君は相變らず職務勉强て結構だ。細君は此頃御丈夫か。妻が始終お噂をしては氣遣つて居る。マア是れだけにしておかう。





Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

# 菊坊のお話

竹田の叔母さんは此間僕の頭を撫てゝ「菊坊、お前位の年が一番面白い時だね」と仰しやつた。然し僕は思ふ、叔母さんは僕等の事を善く知らないのだ。叔母さんは一週間もかゝつて凧を拵へて、そして其れを初めて昇した時に其尻尾を人の家の高い木に引かけて、それを外しに行かうとして其家の人に叱られた事などありはすまい。叔母さんは又、非常に好い鉛筆を、それをやらねば撲られるから、仕方なしに年上の大きな小供にやつた事などありはすまい。叔母さんは又、奇麗な繪本を持つて居る時、見つかるとイツモの惡い奴に取られるから、ソッと學校の後の方で見た事などありはすまい。叔母さんは又、其惡い奴に新しい帽子を取られて、泥水の中に投込まれた事杯ありはますい。叔母さんは又、赤ン坊が泣いて欲しがるからと云つて



大事のコマを暫く貸してやつて、そして散々其美しい塗を剝めはがされた事などありはすまい。叔母さんは又、二月も三月も小使錢を貯めておいて、それで以て大きな太鼓を買つたれば、喧ましいから叩く事はならぬと云はれた事などありはすまい。

ホントにそうだ、叔母さんは何にも知らないのだ。小供にだつて大人と同じように色々の心配があるのだ。只人に云ふと云はないとの違ひがあるだけの事だ。僕なんぞ新しい洋服を着た事などありはしない。これからだつて迚もありはしまいと思ふ。ナゼと云ふに、僕には二人も兄さんがあつて、ズン／＼と大きくなるものだから、其着られないようになつた洋服は皆んな僕に讓られるのだ。そしてアノ洋服屋のヤツが、僕が遊びにゆきたくて仕樣の無いのを無理に引張つて、尺を取つたり幅を取つたり、うるさい事ばかり仕やがつて、そして仕立直しを拵へて與れるのだ。有がたくも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何ともありはしない。それから學校て僕が運動場に出て鞠投でもやらうとすると、「オイそこなチビ、早く〳〵カンと打ち倒すぞ」などゝ大きなヤツが云ふては無いか。僕は此二年ばかりチットも大きくならないのだもの。僕は幾度も障子の棧で測つて見るけれど、イッても同じ事なんだもの。厭になつてしまふ。大きい兄さんなんかモウ大人のようになつてるぢや無いか。イッになつたら僕も時計なんかさげて歩けるか知らん。時計なんぞマアどうでも好いけれど、僕は早く自轉車に乘つて見たくて仕樣が無い。足が屆くものかと兄さんは云ふけれど、ナニ僕だつて自轉車に乘れない事があるものか。十二歳にならなけりや自轉車に乘る事は出來ないなんて、そんな馬鹿な事があるものか。僕は此頃菓子なんぞ食はないようにして、痛いほど首を延ばして居るけれど、それでも矢つぱり菊坊々々と內では云はれるし、チビだ〳〵と學校ては云はれる。ホントに叔母さんなんぞ何んにも知りはしない。知らない筈だ、叔母さんは男の子だつた事は無いのだもの。

番頭「コレ長松。お前は右の耳から聞いた事を直ぐに左の耳から拔かしてしまふ。

長松「番頭さん、耳の二つ付いてるのは其爲かも知れませんぜ。

# 家庭文庫　古書新書

△細君必讀　我輩は第一號に續いて今一回浮世風呂を引用せずには居られぬ。第一號にて「女中を罵るおかみさん」の一節を讀んで「ほんとに此通りだ」などゝ微笑を漏した細君があるならば、今度は左の一節を讀んで、何とも云はずに苦笑をせねばなるまい。是れは浮世風呂の中で女中二人が岡湯をつかひながらの話を書いたもの。（前號參照の事）

## △をかみさんを罵る女

下女おべか「お猿どん今のをきいたか今一人おさる「ウヽ聞たはおべか「よく志やべくる婆さんだのさる「さうさ婆はあたりめへだが、金溜屋のおかみさんよ、人品の能風をして居てとんだ目口乾だの、遊ばせの入らッしやいのと、たべつけねへ言語をしてもお里が志れらア、あれだから奉公人が居着ねへはな、マアためしてみな、去年まで居たお三どんは、六十四文ばかり出て來た人だから久しく辛抱も志たらうが、あの跡で幾人出たとおもふ、たつた十月ばかりの間に丁度五人かはつたぜべか「どうせ又、あのてやいの氣にいらうとすれば直さま勞咳ださる「志れた事さ、何又あの家でも貰はうちやアあんめへし、高が一年限てふい／＼と風まかせの奉公だものを、同じ直ならば氣散に暮す方が德さ、針を持うと持めへとこつちの量見づくだ、縫物が出來ねへて打遣られた女もねへもんだはな、こちとらはどうで着た限雀ときてゐるから、氣に入た着物をさつ／＼と着殺がいゝのさべか「その方がさつぱりして能はな、見たがいゝ、てんてんが奉公人をわるくいふから、又奉公人の方でもわるくいふ筈だア、差引て見りやアお互ッこだから損も德もねへはなしだ、ヲヤ損も德もと云へばお猿どん聽な、頃日まで挿た京翠杜の簪のさる「ウムべか「あれを下に遣て挿込みのある簪と取替たがの、二朱と六百いくらか足たはな、餘程な損をしたよ、さる「そりやあおめへ些とは損をせざらにさべか「しか

し流行だから能のうさる「コウ〳〵きゝな、おべかどん、昨日小間物屋のお車口が持て來た鼈甲の櫛さ、ばら擲て甲の能さとした事が、山の恰好から何から今風て、最う〳〵ふるひつく樣だつた、御新造さんの不斷櫛になさる櫛を下に遣て、三兩いくらとか打と云たけか、昨日は相談が出來なんだが、あの人はちやらッぽこ者だから、御新造さんにきつと賣つけるのさべか「おめへン所の小指も派手者だのさる「派手者所か、髪は髪結のお櫛さんが常詰か、小間物屋は四五人這入込はな、アノマア親だまのあたじけねへに合しては不思議に買てやるよ、ヤレ薪が入過るの、炭が多いのと、おいらには小言をいふけれど、御新造さんには御意次第、何でも角でもヲイ〳〵さべか「よつぽどのろい男だのさる「のろいばかりぢやアねへ、生が入聟だにの、店者上りだから女珍らしいのよ、二朱や三朱の女郎にばかりだまされて居た上句に、艶な女房を初て持て見た吻たから、そりやアおたまりやアねへべか「尤だの、全体能御器量ださる「ちつと權があるよ、あれて愛敬がありやア鬼に鐵棒さ、べか「餓鬼に苧売とはおいらが事たらう、そんな櫛や簪を買ふ事もならずさる「きつい事はねへ、おいらが三年ぶりの給金が不斷挿さ、そりやアさうと、おらア伯父さんの來るのを待居るがさつぱり來ねへべか「又ねだるのかさる「さうさ、伯父御でもいたぶらねへきやア、出所がねへはな、鮪が大分とれたから、川岸の問屋へ仕切を取に出る筈だがなぜ來ねへ志らん、そしての、内て給金を借やうといへば、最う遣ひ切たか、錢遣ひが荒いの、何のと、只でも呉るやうだべか「おめへ又さういへば能、こつちは錢遣ひがあらい、おめへがたは人遣ひが惡いッさる「違ねへ、おべかどんおめへン所もやかましからうよのうべか「やかましいの何のぢやアねへ、其癖にあたじけなくッての、云はう樣はねへはな、三年前の酢くなつた澤庵二切、たま〳〵惣菜といふ所が鼠尾藻の中へひしこを三疋、精進日が荒和布に油揚の細引たのが二切さ、店の衆はてん〳〵に料理茶屋這入をして、



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うまい物のくすね食をするから能が、こちとらはつまらねへはな、其癖夫婦してうまい物は食ふけれどの、内のものには見せたばかり、あれが悪いはな、いつそあたじけねへなら、てん〱も食ずに居りやアよし、似た物は夫婦とやらでどれも〱憐のねへ代物さ、それに又あの兒めが、いび〱啼て、びゃりッ子て我儘育ときてゐるから、小僧どんはみじめよ、何でも角でも云ひなり次第、離し飼と云ふ物だから、悪くあまやかしていけるもんぢやアねへ、能く育りやア相應に可愛氣のある子だけれど、猫撫聲の親めらと、舌ッ足らずの眞似をする兒は、見ると面が憎い、あれほどな夫婦だが親馬鹿とは能く云つた物だよ、今の分で大きくなつたら、あの兒はろくな者にはならねへ、いけッ悋くして溜た金は、さゝほうさにされるのよ、ホンニ〱見る樣だアさる「子にはあまい物よのうべか「聽な、どう思つたか歳暮に足袋一足、年玉に孔方を二百與れたがの、おほかた氣でも違たらうよ、其代に元日しまから小言だ、三



日でも節句でも未練みしやくはねへ、いび〱いび〱と箸の上下だからうるせへ、それから見りやア、お猿どんの所なんざア、能旦那樣だ、何辻不自由がなく、第一氣がつまらねて勤能はさゝろ「なアに、他から見りやア、さうだけれど、あんまり能こともねへのよ、いづくもおなじ春の夕暮とやらさ、せめて正月だから晝の内湯へ來ようと思つて云ひだしたらの、小指のいふ事を聽な、正月と云ふ物はいそがしいもんだから、用でも仕舞て行が能とぬかさア、そりやア百も承知だけれど、松の内は早仕舞なり、そちこちする内這入損ふから、こつちは手廻しをする氣よ、不斷夜るばかり這入て居るから、たま〱は、だまつてよこしてもよささうな物だが、依怙地悪い人よ、おらが内なんざア、親指が是式といふもんだから、(ト左の手でのむしかたをして)他からうせる客めらが、みんな、酒ッくらひよ、見たくてもねへ、日がな一日皿鉢を拭たり返したり、あれにもおそれるぜへ、下手な料理茶屋の樣だはな、丕躰酒客といふ奴は人の想像の

ねへもんだヨ、他の奉公人をばうぬが飼つた狆兒の様に思つて、好三昧をぬかしての、夜中までぺんぺんと飲居らアな、こつちは晝の勞れでちつとも早く寢てへと思居るに、夜深早更まで能氣になつて洒落居るが、箒も灸も利くもんぢやアねへ、てん〳〵は腹さんざ朝寐をして、ヤレ宿酔だの、頭痛だのとぬかして、藥を吞だり、水雜炊を食たりして、うんすん云ひながら、八ッ九ッまで起居た奉公人の想像なしだ、料理茶屋なら花でもはづむだらう、こちとらにはおかげて小言さ、お忝けても何でもねへ（トはなして居るう しろの方に別家のかみさまいつの間にか來てゐるゆゑ狼びつくりして顔をおかめ）然し御新造さんはわかつたお方さ、一躰お慈悲深いから勤る者の仕合さ（トおべかと顔を見合せ舌をペロリ）サア這入らう

△懺悔（山路愛山著）是れは有名なるユーゴーのミゼラブルと云ふ小説の初の方だけを翻案した者。此小説の大躰の反譯は「噫無情」と題して今万朝報に載せられて居るが、それに略されたミリエル僧正の話が丁度此「懺悔」に委しく書いてあるので、兩方を合せて讀むと一層面白いであらうと思ふ。著者愛山君は評論家として知られた人であるが、此様な小説文においても亦妙を極めて居る。（定價二〇錢、民友社發行）

△酒道樂（村井弦齋著）報知新聞に今載せられて居る「食道樂」と云ふ小説には、お鳥羽さんと云ふ料理の名人があつて、色々珍らしい料理法を話して聞かせるので、多くの家庭に珍重愛讀せられて居る。我邦の家の交際間などでは「お鳥羽さん料理」と云ふ名がついて居る。此小説の作者たる弦齋君が、近來專ら敎訓の爲に筆を取るのは、我等の感服に堪へぬ所である。今度春陽堂から出版せられた「酒道樂」と云ふのは、是れも曩に報知新聞に載せられた小説で、自然に酒の害を悟らせるように書いた面白い本である。

△家庭小話（羽仁もと子著）「東西育兒法の比較」「日本西洋奥様かたぎ」など題する短文を集めたもの、考へも穩當で、文章も甚だ善くて、婦人にはチヨット善き讀物である。

# イソプ教訓談

## （三）　狐と山羊

狐が深い泉に落ちて、どうしても逃げる道がなく、全く擒になつて居ると、そこに山羊が喉を乾かしてヤツて來て、それは善い水かと狐に問うた。狐は其困つた身の上を押しかくして、實に何とも云はれぬ善い味だと、さも愉快げに水の事を褒めちぎつて、山羊にも下りて來いと勸めた。山羊は水の飮みたさに、何の考へもなく飛びこんだが、まだ其喉の乾きの止まるか止まらぬかに、狐は逃げ道の無い事を山羊に話して、二人の助かる方案を相談しかけた、狐曰く、「貴樣が前足を此縁に掛けて、頂を俯向けて居て呉れるなら、己れが貴樣の脊中にあがつて其れから外に飛びだして、そして跡から貴樣を助けてやらう。」山羊が又それを眞に受けて承知したので、狐は其脊中にポイと乘つて、山羊の角を足がかりにして、首尾よく泉の口に這ひあがつて、其まゝサッサと行かうとした。山羊は怒つて、



狐が約束に背くのを大變に罵つたが、其時狐は跡を振り向いて斯う云つた「馬鹿め。貴樣に其鬚ほどの智慧があつたなら、上り道の無い處に飛びこんだり、逃げ道も知らぬ危い事に掛かりあつたりはせぬ筈だ。」

## （四）　熊と狐

熊が慈悲心に富んで居る事を自慢して、總べての獸の中で、人間に對して一番やさしいのは自分で、自分は人間を尊敬するから其死骸にすら手を觸れた事が無いと云ふと、狐が其れを聞いてニヤリとしながら熊に云ふよう、「されば、死んだのはヨシ食うても、貴公が生きたのを食はぬと善いけれどなア。」

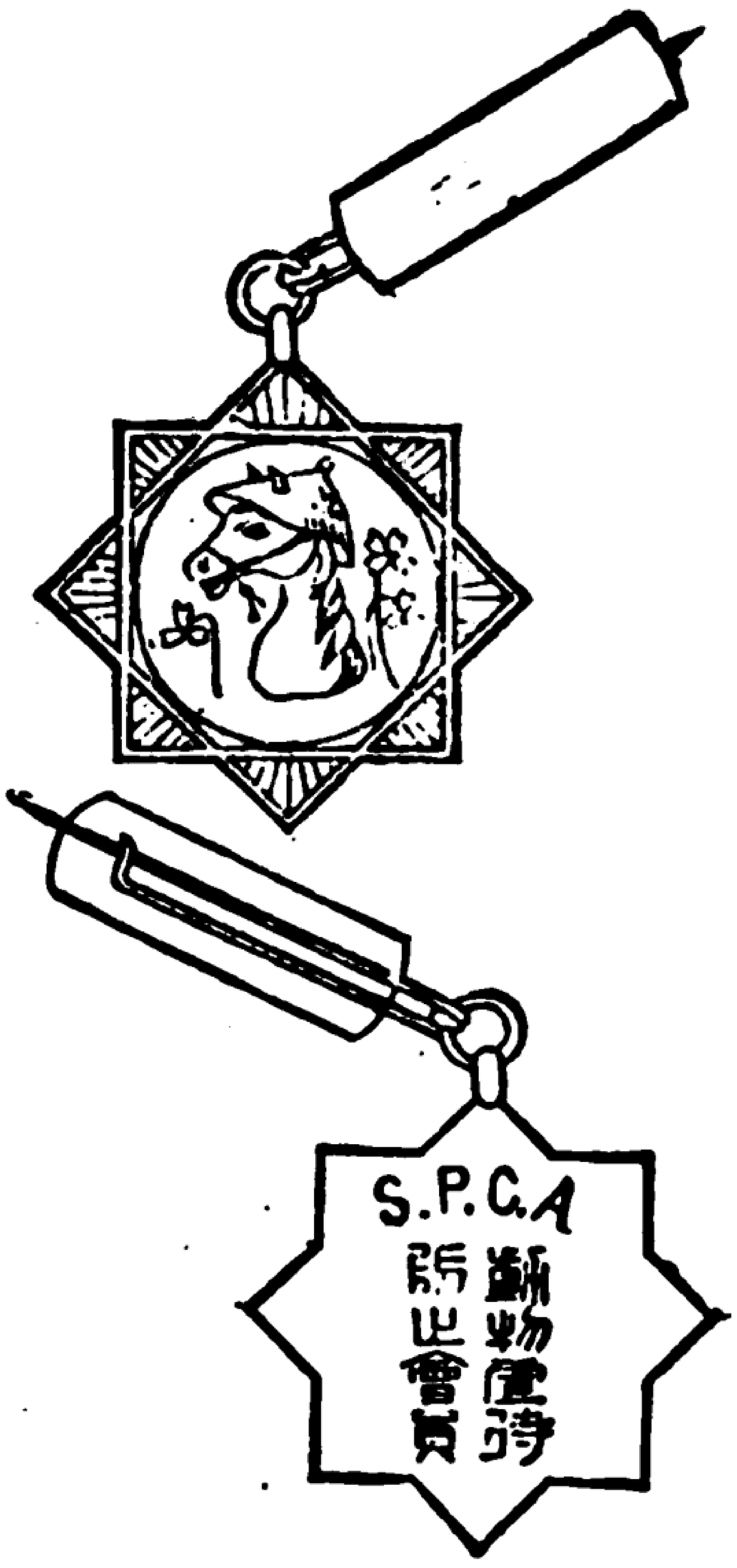
奥樣「梅や、又皿をおこわしだね。
女中「ハイ、でも仕合はせと眞二つにこわれました。
奥樣「眞二つにこわれて何が仕合はせだえ。
女中「でも奥樣、粉みぢんにこわれると拾ひあつめるのが大變ですもの。

# なにやかや

▲讀者の顧問　我輩は常に讀者諸君の顧問となりて、何事によらず相談に應ずる積りである。諸君もし何か知りたき事あり、或は又深く思ひわづらふ事などもあらば、遠慮なく我輩に御相談ありたし。

▲樂しき生活　我輩は讀者諸君の中から、樂しき生活(或は珍らしき生活)の通信を得たいと思ふ。暇ある方々、一筆の勞を惜しみたまふな。

▲動物虐待防止會　趣意書御入用の方は郵券二錢、徽章御入用の方は代價及び郵税廿三錢(郵券ならば廿五錢)御送りあれ。徽章は形も大きさも左の通り。(以上三項前號參照の事)




▲家庭の新風味　是れは内外出版協會から出版した我輩の小著述で、本誌の讀者諸君には、いつか善き折に、是非御一讀を願ひたいと思ふ。就いては本社において取次を致し、猶諸君に對する本社の志しとして、

△奇麗なる赤き表紙の合本

として郵税なしにて差しあげます。(全六册定價壹圓)

▲其外我輩の著述は便利の爲め總べて本社にて取次を致す。目錄及び定價等左の如し。

△家庭夜話(堺枯川編輯)　(全三册壹圓、郵税十錢　各册卅五錢、郵税四錢)

第一册(原作はゾラのフルートフルネス)　子孫繁昌の話(堺枯川譯述)

第二册(原作はゴールドスミスのヴイカ、オブ、エーキフイルド)　質素儉約の話(加藤眠柳譯述)

第三册(原作はストー夫人のアンクル、トムス、ケビン)　仁慈博愛の話(志津野又郎譯述)

△言文一致普通文(全一册、定價二十五錢、郵税四錢)

△枯川隨筆(全一册、定價廿五錢、郵税二錢)

▲枯川隨筆　是れは今度「家庭文庫第一篇」として内外出版協會から出版せられたが、其名の示す如く、只折に觸れての隨筆で、別段に家庭と云ふ事と深い關係は無い。と云つて、我輩か我輩の書いた文字に對して責任を避ける譯では決して無い。

▲ユートピアの話　第一號に引きつゞいて載せる筈であつたが、少し話の順序に考へもあるので、暫く預る事とした。いづれ其中あらためて書きはじめる。

# ●匆々一筆

▲呑氣城君　より本誌第二號發行前後に出產あるべき赤ン坊の名について御相談があつた。淺草の觀音樣の安產の守に依つて男と極めてある所が甚だ面白い。御示しの中では、幸太郎、民丸の二つが至極の善き名と存じます。

▲寒本新藏君　より三夫婦ぞろひの或家庭の事を通信しようかとの御事、第三號にゼヒ載せたいものと思ひます。

▲戸次敬一君　より「社會主義が圓滿に行はるゝに至る順序」につきての御質問。是れはゼヒ詳細に御答いたしたいのですが、編輯上少し都合があつて今二三號後の事に願ひます。

▲寒川陽光君　より「小生も此頃は老母と妹とそして妻と四人で家庭を形成するの止むなき運命と相成りまして、いつぞや佐野行の汽車中の議論が今更をかしくて堪りませぬ」とのお言葉、誠におめでたう存じます。それから又雜誌の編輯法に就て「此上の慾を申せば成るべく教育するよりか樂ましめる方でありたいと存じます、學校へ追ひやるよりか芝居を見物させるといふ覺悟でやる方が必要だらうと存じます」との御諭し、既角理窟を云ひたがる小生には正に是れ頂門の一針、有がたく存じます。

▲山田穀城君　より毎號新潟新聞の紙上で本誌の紹介をしてやらうとの事、好意多謝々々。

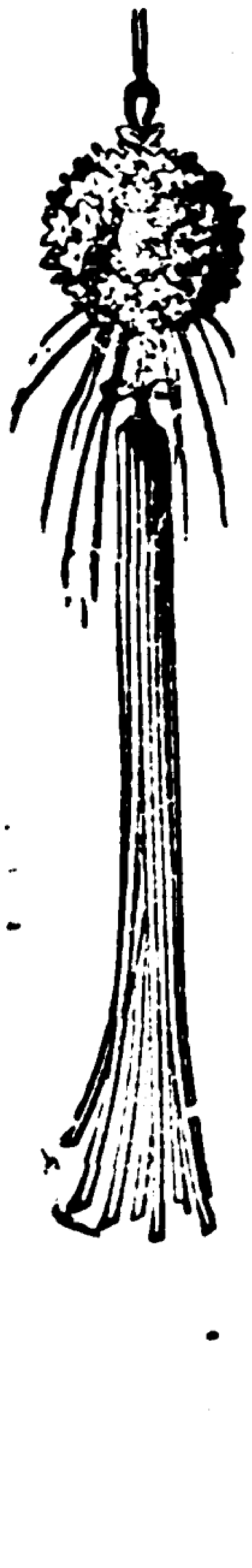
▲齋藤淸太郎君　より「小事業とのお辭に候得共事業の大小は其精神にありて其事にあらざる樣承及候」との御誡め、實に嬉しく承りました。折角奮發の心得であります。

▲今村力三郎君　より「小生は一夫一婦の原則を確守する決心なき者は婚姻を爲すの資格なきものと斷言仕候」との御言葉、今の流行辯護士中、亦斯くの如き人あるかと思へば、大いに心強く感ぜられます。又「從つて足下の雜誌が醜業婦の寫眞を口繪とせる某誌の如く歡迎せられざるは想像に餘りあり」との御同情感謝の至りであります。

▲伊内太郎君　より「早速顧問欄に御すがり申度一事出來、……今朝交番の巡的が屆が無ければ犬を撲殺するとか申したので愚妻殆んど狂亂の體、僕貧たりとも一疋の納税位は致さるべく、なれども當時犬三疋、猫三疋、……就ては黑(子の方)を番犬として御飼養被下間敷哉」との御相談、小生方にも犬一疋、猫一疋、此上と申しては……。

▲橫濱信濟生君　より「現今商人の家庭は凡ての家庭中最も圓滿を缺くと思ひます、……歐米諸國の樣に營業塲と家庭と別なれば善いのですが、今すぐ日本商家をソンナ風にする譯にも參りますまいし、殆んど弱つて居るのです」との御嘆息、如何にも御尤も、其中これにつきても何か書いて見たいと思うて居ります。

▲南海君　より「私はこの新しい趣味ある家庭を作らんがために從來の家庭を破壞いたしました、大切なる老父母は養はず、妹二人は見捨て、妻は離縁、全くの離縁では無いが二人が十分良家庭を作り得る素養が出來るまでは同棲せぬつもりで互に兄弟の約束を結んで居ります、あゝ天は此愚鈍な二人にも一つの良き家庭(どんなに小くても)を作らしめ玉ふてあらうか」との御述懷、天は必ず御兩人に良き家庭を作らしめ玉ふ事を小生は堅く信じて居ります。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA